

ヒトとムラを見守るよりどころ

～支援型自動販売機を通して～

崇城大学 秋元研究室 坂口莉果子

①「令和2年7月豪雨の被災地における地域の持続に必要な取組みについて」

1. はじめに

私は津奈木町で生まれ、現在も住み続けている。人吉や葦北には親族がおり、普段から訪れていた地域である。水害は周囲の人たちに対して精神的にも経済的にも大きな影響を与えていると痛感した。被災地域で過ごしている自分だからこそ、課題解決すべきであると考え、参加した。

今回の提案では球磨村の買い物支援を通して、球磨村住民の憩いの場作りをしていきたいと考える。また、球磨村の歴史から自然災害は身近にあることから、日々の暮らしの中でも非常時の備えが必要になる。それは個人だけでなく、地区ごとにしていくべきだ。球磨村の災害と共存した社会の実現の一步となるような政策を考えていく。

2. 現状分析/調査内容

球磨村の持つ課題として、三つのことが挙げられる。まず一つ目として、「買い物難民の解消」がある。令和二年に起こった豪雨と高齢化によって、村内の商店・食堂はコンビニエンスストアを除きゼロになった。車の運転ができる世代は人吉や葦北などに買い物へ行けるが、それ以外(子供や高齢者)は買い物が難しい。現在応急処置的な方法として、移動販売が行われている。しかし、移動販売は一時的な支援にしか過ぎず、今後移動販売が失われる可能性がある。住民への聞き取り調査によると¹⁾、日用品を買いに行く地域は“球磨村以外”が約90%を占め、球磨村で買い物をしない理由として、“求めるものがない”、“近くに店自体がない”がそれぞれ63%を占めている。また求める店として、“品揃えが多い”、“ちょっとした日用雑貨が買える”があわせて65%であった。更に災

害前から公共交通機関の利用は限定的で、大槻や楮木など山間部の集落では高齢化が特に顕著で、買い物難民の増加が予想される(図1,2)。

二つ目に「災害時の対応」がある。令和二年度豪雨によってほとんどの集落が孤立し、救助や避難をするのにも時間がかかっていた²⁾。日にちがたつことで、食品や日用品も限界が生まれる。現在球磨村では災害時の避難所及び備蓄場所は限られており、その備蓄内容も避難時の住環境を整える物が主で、生活に必要な用品はない。今回の災害では、指定避難所が被災したため、機能していなかった。こうした現状を踏まえ、今後は集落ごとに日用品を含めた備品を用意することは不可欠である(図1)。

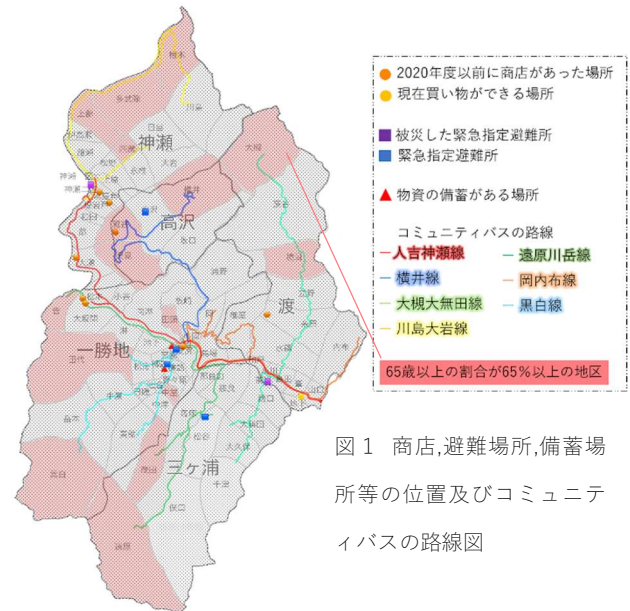


図1 商店,避難場所,備蓄場所等の位置及びコミュニティバスの路線図



図2 球磨村住民の買い物に関するアンケート結果

三つ目は「寄り合い場の減少」である。球磨村では日頃から集会施設や商店などに集まり、住民同士の交流が盛んであった。しかし多くの施設が被災し、現在も使えないところがある。一方、都市では公園が住民の憩いの場であり、かつ避難場所としての機能も持つが、球磨村のような集落では公園がないため、普段から集まる場はもちろん、もしもの時のために、災害時の状況を考えた場の確認が必要である。

3. 課題に対する解決策と具体的な政策アイデア

これらの課題を解決するために「人と村を見守る支援型自動販売機」を提案する。自動販売機を設置することで時間を決めず、自由な時に買える。その周辺にはベンチなど小休憩する場があり、何気なく会話ができる日常的な憩いの場となる。

この場には3つの要素を持たせる。

一つ目に「日用品と特産品の販売」である。飲み物だけでなく、日用品や食料も取り扱う。聞き取りにより住民は日用品を、移動販売では生鮮食品を求めていた^{1,3)}。品数は限られるが自動で販売を行う。また、特産品も取り扱う。これまで特産品は主に物産館で扱われ、地区内では無人販売所で扱われることもあったが現在は利用されていない。球磨村の住民には今もおすそ分けの文化が残っている。この販売所では村人に対しては販売というよりは交換の、それ以外の方々へは良心に沿った販売とする。基本的に地区ごとの管理とし、地区内で商品や経済が回っていくことを期待する。

二つ目に「災害時の日用品の供給」である。自動販売機の中の日用品は、災害発生と同時に無償で提供できるような仕組みを持つ。水害時は断水を余儀なくされ、道路網の寸断により、物資の提供に時間がかかった。自動販売機の中の日用品は、非常時の備蓄を兼ねており、災害に強いむらづくりを目指す。

三つ目は「地域のつながりを確認する」ことである。地区ごとにこの場を設け、住民の多くが歩いていける距離にする。外に出るきっかけをつくり、ほかの人と出会い、話す機会を増やす。また、今まで集いの場に来なかった人たちも買い物を通して、この場に足を運ぶことで、新たな関係や環境が形成されるだろう。

更に、人の居場所を伝える機能を設ける。子供や高齢者にはキーホルダーを持たせ、自動販売機を通ったら、保護者や家族に位置をアプリで知らせるようにする。急な災害時・事故時でも場所を伝えてくれることで、安否確認がしやすく、高齢者・子供たちの様子を知らやすくなる。尚、電源は太陽光パネルなどの自然エネルギーの利用を考えている。

4. まとめ・今後の展望など

食料を扱う自動販売機を設置する上での課題として、食品衛生法が挙げられる。海外では実際に食肉を販売しているケースもあるが、日本の食品衛生法ではまだ難しい部分がある。球磨村で移動販売を行う事業者5社にインタビューをしたところ³⁾、最も売れるのが生鮮食品であるという結果だった。このような求められている食品を手軽に買えるようにするにはどうしたらよいか考えていく必要がある。

最後に、この支援型自動販売機と周辺の場を通して日常ではひと息つける場とし、非日常時では住民たちの頼りになる場となり、「地域のコミュニティの核」として、地域に根ざした居場所にしていきたい。

注・参考文献

1) 現地調査:7月30日、8月13日、10月8日、10月9日

聞き取り調査:10月9日 対象者:球磨村住民 40名
内容:球磨村住民の普段の買い物に関する実態調査

2) 球磨村役場 復興計画の被害状況について

[https://www.kumamura.com/gyousei/wp-](https://www.kumamura.com/gyousei/wp-content/uploads/2021/03/e3b53ee4a58d8c62654ddbffe0d18798.pdf)

[content/uploads/2021/03/e3b53ee4a58d8c62654ddbffe0d18798.pdf](https://www.kumamura.com/gyousei/wp-content/uploads/2021/03/e3b53ee4a58d8c62654ddbffe0d18798.pdf)

3) アンケート調査 10月12~25日

対象者:球磨村で移動販売をおこなっている事業者5社
内容:移動販売を利用する住民の実態調査と販売状況